特集：環境とジェンダー

環境問題・開発問題における女性の不可視化と周辺化

― 沖縄県石垣市新石垣空港建設問題の事例から ―

萩　原　なつ子

女性たちが様々な圧力にめげず地道な環境保護運動や環境保全活動を展開し，最終的に社会的な意味をもち，政策提言までつながるという事例はいくつもみられる。ところが異議申し立てをしたり，行動を起こしたりした当初は，社会から「取るに足らないもの」として無視されたり，女性たちの実践や経験に基づいた発言が意味や価値がないと無視されてしまったり（＝不可視化），たとえその後，社会的な意味を認めたとしても，女性を実践の中心から周辺へとおいやり，今度は社会的合意形成や意思決定の過程からも排除される（＝周辺化）傾向にあることは否めない。どうしてこのようなことがおこるのか。

本稿は，このような女性の「不可視化」や「周辺化」に注目し，その過程を，エコフェミニズムの視点から，具体的な事例のなかで検討していくことを目的とする。まず，「環境」に関わる女性の「周辺化」や「不可視化」を社会的な問題として注目し，その改善をめざして1970年代にヨーロッパで誕生し，以降発展してきた「エコフェミニズム」について述べる。そして1980年代に大きな社会問題となった沖縄県石垣島新空港建設問題の事例をもとに，環境問題と開発問題における女性の「不可視化」と「周辺化」の過程を，エコフェミニズムにおけるサブシステンスの概念をもとに検討する。そして，最も重要なことは，環境と開発に関わるあらゆる場面への女性の参画，とりわけ決定過程への参画であることを述べる。

キーワード：環境と開発，不可視化，周辺化，エコフェミニズム，サブシステンス

はじめに

本稿の目的は，環境問題や環境運動における女性の「不可視化」や「周辺化」が発生する過程を，エコフェミニズムの視点から具体的な事例のなかで検討していくことにある。女性の「不可視化」「周辺化」の概念の詳細については，筆者が科学研究費補助金にもとづく共同研究を進めてきた脇田の本誌掲載の論文を参照していただきたいが，ごく簡単に説明すると次のようになる(1)。

女性の「不可視化」，「周辺化」とは，環境問題を取り上げる際に，女性にとっての問題に配慮せず，あたかも存在していないかのように扱われたり，環境保護運動や環境保全活動の現場において，女性たちの実践や経験に基づいた発言が意味や価値がないと無視されてしまったりすること，その結果女性が実践の中心から周辺へと排除されてしまう現象をさしている。

本稿では，まず「環境」に関わるこのような女性の「不可視化」や「周辺化」を社会的な問題としてとりあげ，その改善をめざして1970年代にヨーロッパに登場し，アメリカで発展した「エコフェミニズム」を概観する。次に，1980年代に大きな社会問題となった沖縄県石垣島新空港建設問題の事例をもとに，開発における女性の「不可視化」と「周辺化」の過程を，エコフェミニズムにおけるサブシステンスの概念をもとに検討する。

1．環境問題をジェンダーの視点でとらえる

(1) エコフェミニズムについて

筆者がこれまで調査研究の分析視点としてきたエコフェミニズムについては，すでに国内外のエコフェミニストによる論文が多数あり，筆者自身がまとめてきたものもいくつかある（萩原2001，萩原2003a，2003b，2005）。ここでは簡単にエコフェミニズムの概要について述べておきたい。

エコフェミニズム（eco-feminism）は，ジェンダーの視点から，人口問題，食の安全性，核問題などの社会環境問題や大気汚染，森林破壊，水質汚染な

どの環境問題を捉え，その原因の究明と問題解決を図ろうとする考えや行動を指し，1970年代に社会運動のひとつの形としてヨーロッパに登場した。1970年代から80年代初期にかけてのエコフェミニズムの特徴は，女性たちが近代科学・技術を基礎とする近代産業社会が引き起こす環境破壊に反対し，環境保護運動や環境保全活動を通して女性たちの果たす役割の重要性を認識するところから始まっている。

たとえば人間の生活・生存に必要な水，食料，薬草等を家族に供給するなど社会的・文化的役割（ジェンダー役割）を担う女性たちは日常的に自然環境に依存した暮らしをしているために，自然環境破壊や環境汚染の影響を直に受けやすい。したがってわずかな自然環境の異変や公害にも気づきやすく，環境破壊や健康被害を食い止める行動や自然環境の保全活動を，たとえたった一人であっても始める，あるいは始めざるをえないのである。ここに女性が環境運動の先駆者となり，経済的活動を優先する価値と対立する大きな要因を見ることができる。

エコフェミニズムという言葉自体は，1974年にフランスのフェミニスト，フランソワーズ・デュボンヌが，すでに起きていた環境運動を背景に，新しい環境倫理を説明する言葉として，あるいはまた女性たちに「地球を救う」ためのエコロジー革命を呼びかけるために造語したものである。エコフェミニズムと名づけられた思想は，「人間による自然の支配と男性による女性の支配には重要な関係がある」という洞察から，新しい人間と自然，男性と女性の関係を求める思想としてアメリカでさらに発展をみせることになった。そして，常に，自然/文化，女性/男性をそれぞれ対立させ，社会レベルでの男性優位論，支配の正当化に結びつける二元論を問題にしてきた。

エコフェミニズムの理論の特徴は女性と自然の対立や支配，分離を指向するのではなく，むしろ女性と自然，さらには女性と男性との新しい共生的な関係を構築することにあったのである。しかしながら一口にエコフェミニズムといっても，その発展段階で「女性と自然」の関係をめぐって多様なエコフェミニズムが派生してきたが，相互に影響しあいながら「運動のため」に理論を発展させてきたといえる。

日本においては，「エコフェミズム」と聞くと，1985年に起こった青木やよひと上野千鶴子の両者による「エコフェミ論争」を思い浮かべる人が多いだろう。この論争をきっかけとして，日本においては「エコフェミニズム＝女性原理＝母性主義」というイメージが一人歩きすることになったこと，その結果，海外では着々と進められてきたエコフェミニズムの議論，すなわち，エコフェミニズムの中心的課題である自然環境の搾取と女性の支配を正当化する家父長制的資本主義批判や，開発途上国における女性および環境の搾取と抑圧にかかわる開発政策に対する積極的な発言や新たな理論展開を阻むことになったことを記しておきたい。

(2)　世界システム論とエコフェミニズム

日本ではエコフェミニズムの理論展開がなされなかった期間を森岡は「10年間の空白の期間」と評しているが，その間における海外でのエコフェミニズムの理論展開についてふれておくことにしたい（森岡 1996)。

その代表的なエコフェミニズムの研究者としては，マリア・ミース，クラウディア・ヴェールホフ，V・B＝トムゼンをあげることができる。彼女たちは，一言でいうと，エコフェミニズムの思想と世界システム論とを融合した理論を構築した（ミース他1995)。世界システム論とは，よく知られるように，ネオ・マルクス主義的立場にたつイマニュアル・ウォーラスティンが生み出し提唱した理論である。その基本は，国際分業によって，世界は資本主義経済の中心と，それに従属する半周辺，周辺から構成されるものとして捉えるところに特徴がある。しかし，ミースらの理論の重要な点は，従来の世界システム論では把握できなかった，あるいは，ジェンダー・バイアスのために「不可視化」されてきた女性の労働（アンペイド・ワーク）を可視化し，国際分業の末端労働者として主婦を位置づけたことである（ミース他1995)。

ミースらは，このように女性の労働を批判的に世界システム論に位置づけなおしたうえで，すでに述べたように，ジェンダーの視点から環境問題全般を捉え，その問題点と課題を把握し，人間と自然，人間と人間とがよりよい

関係性を築けるようなジェンダーに公正で，持続可能な社会のあり方をめざすのである。そのさい，彼女たちにとって，オルタナティブな社会を構築していくための基盤となるものが，「サブシステンス生産」なのである。

一般にサブシステンスというときに，辞書的な意味では「生存，生存最低生活」といった意味で用いられる。しかし，彼女たちのいうサブシステンスには，もっと豊かな意味合いが含まれている。もちろん，ミースらがサブシステンス概念で指し示したいことは，最低限の生活，すなわち生存の問題というような限定されたものではない。彼女たちのサブシステンス概念とは，「自然と調和して食べるために活動し，命を生み出し命を維持する協働的な労働，という肯定的なイメージが含まれている」（古田 1995）。

国際分業化された世界システムのなかで，アンペイド・ワークを強制され搾取されている，主婦やサブシステンスに携わる労働者の存在，すなわちそのような主婦やサブシステンス労働者の存在を可視化したとき，それは，自然環境を天然資源として一方的に搾取することと重なってくるのである（ミース他 1995：82））。

このようなエコフェミニズム的な視点から，ミースらは，世界システムを支える，生産力，経済成長，開発等を批判しながら，同時に，搾取や環境・生命の破壊のない生産や生活，それらを保全する運動をも含めて，エコロジカルでオルタナティブな方向性を探求するために，多少のぎこちなさを含みながらも，ミースらはサブシステンスという概念を採用したのである。

次節では，ミースらが提起したこのサブシステンスを意識しながら，沖縄県の新石垣空港建設計画に対する白保地区の住民の反対闘争の事例をジェンダーの視点から分析することによって，女性の「不可視化」と「周辺化」の過程を示す。

2．新石垣空港建設問題にみる女性の「不可視化」と「周辺化」

(1)　新石垣空港建設問題とはなにか

筆者が石垣島を初めて訪れたのは，1999年である。筆者と石垣島とのかかわりは，1980年代半ばに新石垣空港建設問題と直面していた白保地区の住民を主体とした任意の市民団体「魚垣の会」が，空港建設予定地の生活文化と住民と海とのかかわりについて調査研究するために，トヨタ財団の「市民研究コンクール“身近な環境をみつめよう”」(2) に申請し，助成対象チームになったことに端を発している。

筆者はトヨタ財団のアソシエイト・プログラム・オフィサーとして，助成対象チームのフォローアップ調査の担当をしていたこともあり，当時の闘争の状況を間接的ではあるが把握できる立場にあった。当時，新石垣空港建設反対闘争は，表向きには「サンゴ礁の海を守る」というスローガンのもと，「自然保護」を前面に押し出して，地元石垣島，沖縄本島，大阪，東京そして，IUCN（世界自然保護機構）のような国際的環境ＮＧＯを巻き込んでの闘争が展開されていた。

1979年7月21日，沖縄県は，「白保有志会」，「白保公民館審議員」，「八重山漁協」に対して，新空港設置を説明し，その建設設置に協力することを要請した。そして，空港建設を促進するための団体として，「新石垣空港建設促進協議会」が，当時の内原石垣市長を会長に発足した。それに対し，新空港建設計画を事前に知らされていなかった地元，白保では，「新石垣空港白保地区を考える会」を発足させ，反対運動を展開することになった。

その闘争の中で結成された研究グループ「魚垣の会」の研究対象地域は，沖縄県石垣島の南東に位置する白保地区と北半球最古最大の青サンゴが群生し，部落の人々が「魚湧く海」と表現するイノーであった。「海岸から数100メートルのところにある珊瑚礁と海との境界があり，その内側は引潮のときには歩いて渡れるほどの浅い湖となる」（熊本 1999)。この内側の場所がイノーとよばれている珊瑚礁湖なのである。

そもそも，この「魚垣の会」が結成されたきっかけは，白保の海を埋め立

て，新石垣空港を建設するという計画が持ち上がったときにさかのぼる。計画が持ち上がった1979年以来，白保地区では，住民を二分する「新石垣空港建設反対闘争」が展開された。魚垣の会のメンバーの多くは白保地区の住民と連帯して反対運動にかかわってきた人たちであった。

彼らは運動が続いている最中に，空港建設に反対する白保地区の住民が，部落から分断され，人権も踏みにじられてもなお闘い続けるのはなぜなのか，そのエネルギーはどこからくるのか，また，なぜ，白保に青サンゴが残ったのかという問いを発したのである。そして，白保地区に暮らす人々と豊かな白保の自然生態系とのかかわりに焦点をあて，その秘めた力を学ぶことを研究の目的とし，生態学的および民俗学的研究を行ってきたのであった。

彼らの研究の過程でしだいに明らかになってきたことは，新石垣空港建設予定地を含む石垣島東海岸が，日本有数の豊かな海であるということであった。そのような研究成果は，空港建設に先立って行われた環境アセスメントへの批判的研究ともなった。そして，そもそもの研究の目的意識であった「海を守るために10年間権力と対峙し続けた力」はどこからくるのかという問いに対しては，住民への聞き取り調査から，次のような結論を引き出している。

白保地区の人びとや人びとの生活は海とのかかわりが大変深く，その分，海のことを熟知していた。そして自分たちにとっていかに海が大事かということを，季節や天候，山や川といったものをすべてあわせた，自然界というトータルな視点を通して捉えていた。そして確かに海は誰のものでもなく，みんなのものではあるが，しかし，それでもなお自分たちの暮らしと切っても切り離せない「自分たちの海」「白保地区の海」であるという思いを，長年にわたる経験の集積を通じて，強く内面化していたことがわかったのである（萩原 2000）。

彼らの研究の中で，当時，筆者が特に関心をもったことは，白保地区の女性たちと白保地区の自然環境，とりわけサンゴ礁池，イノーとのかかわりであった。「魚垣の会」の研究報告書にそのことが具体的に記述されていたわけではなかったが，白保の海と白保地区の住民との関わりについて語る上

で，女性たちの存在がとても重要に思えたのである。

その思いをさらに強くしたのは，1999年に石垣島で開催された「NGOフォーラムin石垣」に主催者団体の一員として筆者が石垣を訪れた際に，「魚垣の会」のメンバーだった女性，Aさんに新石垣空港建設反対闘争と女性とのかかわりについて話を聞いたときに，彼女の口から語られた次のような言葉である。

「海が埋め立てられるときに，女が真っ先に埋め立てられるさ」。

Aさんは，新石垣空港建設問題が表面化した際に，後述する，ある「事件」をきっかけに石垣島内の別の場所から白保地区に移住し，反対闘争に関わってきた人である。そして，とりあえず白保海上案が消えた今は市内に居を移しているが，今でも当時共に闘った女性たちとの交流を続けている。Aさんは以前から，白保地区の新石垣空港建設反対闘争において女性たちの果たした役割について，きちんと記録しなくてはならないと考えていた。なぜならば，新石垣空港建設反対闘争に関する論文は数多く著されているが，女性たちの存在については「白保住民」というカテゴリーに包摂され，断片的にしか記述されていないからである。Aさんは，女性たちの闘いは単なるサンゴ礁を守るというように単純化される自然保護運動ではない。もっと根源的な「魂」の叫びなのだと強調する。

筆者は，この彼女の語りの背景に存在する，開発問題，環境運動におけるジェンダー問題に，大きな関心を持つことになった。なぜ，「海が埋め立てられるとき女が真っ先に埋め立てられる」のか。なぜ，闘争の記録の中に女性が消えてしまうのか。「存在しているにもかかわらず，存在していないかのように扱われる，あるいは見えないものとされていく，つまり，「不可視化」されてしまう要因，過程に関心をもったのである。

以下では，新石垣空港建設問題に関わる住民運動をジェンダーの視点から検討するとともに，当時，反対闘争に積極的に参加していた女性3名に，彼女らのライフヒストリーも含めて新石垣空港建設反対闘争についての聞き取

りを行った。本稿では，とくに新石垣空港問題における女性の「不可視化」の過程を明らかにするとともに，先に言及したミースらの「サブシステンス生産」の視点を念頭におきながら，三人の語りを分析していくことにする。

(2) 新石垣空港反対闘争に見る女性の不可視化の過程

新石垣空港建設計画に関わる先行研究の検討を通して（鵜飼1992，熊谷1992，家中2001），女性の不可視化に至るまでには，段階的に質の異なる「不可視化」が重層的に存在することがわかった。ここでは，まず新石垣空港建設計画の事実経過を通して，新石垣空港建設を推進する行政と，彼らによって“勝手に”新空港建設の予定地にされた白保地区と白保住民の関係を，「不可視化」の視点から整理しておきたい。

1979年1月，沖縄県主導で新石垣空港建設推進団体が組織化された。これに伴い八重山三市町長（石垣市，竹富町，与那国町），市町議会，経済団体，住民組織，教育団体，労組などを構成団体とする「新石垣空港建設促進協議会」が結成された。ところが空港建設予定地とされた石垣市白保地区の住民が，この事実を知るのは1979年6月12日だったのである。

この段階で，空港建設予定地を決定する社会的な協議の場から，建設予定地とされた「地元」である白保地区の住民は完全に排除されていることがわかる。ここに，空港建設意思決定過程における「第1の不可視化」，すなわち「白保地区の住民の不可視化」を見ることができる。そして，建設推進が決定されたということを，白保の住民が，沖縄県空港課長，石垣市長から説明を受けたとはいっても，それは，白保公民館役員，審議員，市議会議員のみだったのである。この中に女性は一人もいない。

この時期，白保出身の教員が主体となって「新石垣空港白保地区建設を考える会」が結成され，反対署名を開始した。署名では白保地区の有権者のうち92%（845人中779人）が建設反対に賛成し，1979年12月25日に開催された白保公民館定期総会においては，これらの署名をもとに，新石垣空港建設計画に対して全員一致での反対決議がなされたのである。

白保公民館総会の反対決議により，白保公民館長は空港建設に関わる県や

市による説明会の受け入れを一切拒否する姿勢を示した（1980年5月）。このような地元の白保地区の反対決議を受けて，建設推進側の沖縄県と石垣市は，建設予定地のさまざまな行政手続きの相手を石垣市とし，石垣市議会の決議を十分条件とした。また，行政手続きにしても，建設予定地内の地権者や漁業権者の埋め立て同意のみを求めることにしたのである。

1980年12月，沖縄県は航空法にもとづく空港設置許可申請を行った。それに伴い公聴会の開催を告示した。この公聴会で意見陳述を求められているのは，飛行場の区域などに「私法上の権利を有する者」，すなわち，地権者や漁業権を持っている個人もしくは法人であった。つまり，白保地区の住民全員が公聴会で意見陳述することはできず，ましてや集団として白保公民館の意思を表明する機会もないことになる。これら一連のことは，石垣市にある「白保地区」と住民の存在そのものを覆い隠し，見えないものとし，白保公民館総会の決議をも無視しようとしたのである。これが，「第2の不可視化」である。

しかし，鵜飼（1992）に詳しく説明されているが，行政側は「白保公民館」の決議の重要性を無視することができず，従来からある公民館とは別に，賛成派の住民や推進派を組織員とした「第1公民館」を設置した。そして第1公民館の総会における賛成決議を白保地区の地元住民の「総意」として位置づけ，「住民合意」を形式的に整えるという操作を行っている。「決議」は無視することはできなかったが，行政主導で「第1公民館」を設置することによって，既存の，しかも白保住民のほとんどが帰属意識をもつ「白保公民館」の存在は無視されることになった。以降，ふたつの公民館が存在することになり，賛成派，反体派が相互にお互いの「公民館」の存在を「無き物」とし，「不可視化」しようとする事態が続くことになったのである。

次に，空港建設予定地内の地権者と漁業権者の補償問題についてジェンダーの視点からみてみることにしよう。白保のイノー（珊瑚礁湖）で操業しているのは，いわゆる漁師（沖縄では「ウミンチュ」という）だけでない。「オバァ」(女性をさす)たちも，イノーで貝や海草を採っている。ところが，新空港建設の予定地として白保の海上案が浮上したとき，オバァたちに賛

成，反対の意思表示の機会すらなく，また漁業権に関する保障金もまったく支払われなかったのである。

オバァたちの存在がある意味無視され，漁業権に関する保障金も支払われなかった最大の理由は，漁業組合の組合員ではなかったことにある。漁業法では，組合員でなくとも，慣習として貝や海草を採る権利は保障されている。それにもかかわらず，オバァたちに反対の意思表示をする機会がなかったり，保障金が支払われなかったりしたということは，漁を営んで生活する生産者として認められなかったことを意味するのである。このことは，手続き上，彼女らが空港建設によって影響をこうむる人々，すなわち“当該住民”には含まれていなかったことを意味する。白保の開発問題において，オバァたちのニーズや役割はまったく配慮されていなかったわけである。

このような事実から，ただちにジェンダー問題を指摘することは難しいかもしれない。しかし，もしイノーで生計を立てているのがオバァではなく，「男」たちだったらどのような結果になったのであろうか（萩原 2005）。オバァたちにとってイノーがどのような意味を持っていたのかについては次節で述べる。

ところで，CさんもDさんも公民館の決議は唯一絶対であると口を揃える。

> 「部落の公民館の決議に従うのが，白保の部落の人たちの本当の姿であってさ，ここにおりながら，公民館の決議に反対する人は，よそもの，でてききなさいなって私がいったさ。賛成の兄弟にもいったよ。」

確かに新石垣空港建設問題の反対決議については，公民館の総会において，全員一致で反対することで統一された。したがって，CさんやDさんの思いと乖離せず，反対闘争に参加することができた。しかし，もし，違う決議が出されたとしたら，彼女たちはどのような行動にでたのだろうかという疑問が生じた。そこで筆者は，Cさんらに「もし，部落の公民館が賛成の決議をしたらどうしますか」と聞いてみた。Cさんは，間髪いれずに語気を強めて言った。

「いや，反対よ。反対してたよ。それは，海で助かってきたから，海のことなら反対するよ。公民館が賛成っていったら，公民館にはつかなかったさ。事と場合によって違う。」

「海のことなら反対するよ」というCさんの海に対する強い思いについては改めて次節で詳述する。しかし，公民館が賛成決議をした場合，Cさんの「反対」という意思は果たして取り上げられたのだろうか。というのも，「新石垣空港建設反対」という公民館決議の際でさえも，男性の住民はもとより，女性たちが一住民として意見をいう機会はほとんどなかったと思われるからである。たとえば，家中（2001：133）は公民館の総会や反対集会の様子を次のように述べている。

「公民館の総会や反対集会で，住民は各自の意見をおもいおもいに表明するというわけではない。公民館長や新石垣空港建設阻止委員会委員長などのリーダーたちが反対運動の意義や具体的な行動を語るのを，住民はじっと耳を傾けて聴いている。その様子は一見，一方的なコミュニケーションのようにみえるかもしれない。しかし，住民たちは，リーダーたちの心からの訴えかけにこれまで生きてきたさまざまな生活の場面を想起し，いわば口説かれるようにして，自らの想いを重ね合わせていくのである。」

この記述から推察できることは，一見平和な風景に見えるが，白保地域の住民組織において公民館長や委員長といった，地域のリーダーは物事の意思決定に際して，影響力が大変大きいことは明らかである。実際，公民館長が地域の意思決定を左右するといっても過言ではない。だから，誰を公民館長にするのかが村の重要な政治的課題となるのだろう。しかし，女性がリーダー，すなわち公民館長や運動のリーダーになる可能性は少なく，あくまでも「長」は男性なのではないか。また，公民館決議は絶対といっても，その議論の場において女性たちが政治的意思決定に関与できる立場にはなかった

のではないだろうか。この点は残念ながら検証できていないので，あくまでも聞き取りからの推察にとどまる。

白保海上建設案に対する新石垣空港反対闘争は，建設計画発表から13年にわたって，主に埋め立て予定地に生息する白保の青サンゴ礁の保護をめぐって争われた。闘争の結果として，白保海上に建設する計画は中止となり，サンゴ礁は守られた。しかし，この新石垣空港問題の過程をジェンダーの視点からみると，これまで見えてこなかった事実が明らかになってくる。それは，新石垣空港建設によって最も影響を受ける人々，つまり「女性」たちの存在が無視されたということだ。

すでに述べたように，Aさんはそのことを「女が真っ先に埋め立てられる」という言葉にして表現したのである。Aさんの言葉の意味は2つある。ひとつは，「制度上」，女性が無視されていることであり，もうひとつは，「生活者として」の女性が無視されているということである。これらの点について，まず，「土地や自然資源に対する女性たちの権利」という視点から見てみることにしよう。

白保においても，女性は主たる農業生産者であったが，土地所有権そのものからは排除されてきた。しかし，すでに述べたように共有地であるイノーは男女に関わりなく，アクセスが認められていた。もっとも，漁業権のように法的な権利ではなく，慣習的な権利のレベルである。そのことが，結果として漁業補償の対象とならず，補償金を得る権利を女性から剥奪することにつながった。事実，白保地区に住む女性たちには補償金は一銭も支払われていないという。

空港建設問題に伴う漁業補償は男性にのみ認められたのである。さらにいうと，白保に住んでいない漁民に対しても支払われているという事実は，漁業補償の根拠となっている漁業組合の組合員であることの概念は，白保の海で貝や海草を採って生活する女性の存在と，組合員でなくとも慣習にもとづいて貝や海草を採る権利の両方を無視していることになる。漁民＝男性，漁民の妻，農民の妻という表現があるように，女性は男性に従属した存在であるという認識が，女性の存在そのもの，そして女性の権利を「不可視化」さ

せている。

一般に，土地の権利，農地改革，協同組合員に関する法律は，女性に差別的であるといわれている。たとえば，組合員資格が男性に限定されていたり，漁業権のような法的な権利をもった人に対して利益が限定されている場合，女性や権利を持たない男性は排除され，利益を得ることがない。いわゆる「資格のある市民の間の分配平等」であって，そこから女性たちは最初から「周辺化」され排除されている。

やはり女性たちのニーズや視点が地域政策，地域計画の中で十分考慮されなかったのである。

(3)　新石垣空港建設をめぐる白保地区の女性たちの闘い
―開発のパラドックス―

白保地区における新石垣空港建設反対闘争は，すでに述べたように新石垣空港建設が公になった1979年12月に白保公民館が総会で新空港建設反対を全会一致で決議したことに始まる。もちろん，後述するように女性たちも公民館決議のことは承知しており，反対決議に同調している。しかしながら，具体的な行動として反対闘争に積極的に関わっていくきっかけとなったのは強制測量がおこなわれた時期からである。強制測量がおこなわれたのは，1979年9月に沖縄県が新石垣空港建設位置を地元の同意なしに白保海浜地先に決定，12月に白保公民館が新空港建設反対を全会一致で決議した3年後のことである。

Aさんは，1983年に石垣市のある地域から白保に移住した。その理由は，沖縄県が，土地収用法を適用して，警察隊の導入のもと強制測量を開始した時の模様を，テレビニュースの映像を通して見て衝撃を受けたからだったという。

「最初の強制測量のときさ。Bさんのキビ畑の苗がまだこんなときさ(ちいさいとき)。機動隊がどたどたやってきて。BさんとBさんの嫁，両方未亡人さ。女の細腕で作っている畑に，どたどたやってきて。二人う

ずくまってね，その周りを警察隊の盾が取り囲んでさ。そういう映像が映し出されたのよ。丸腰の年寄り，しかも女性をよ，全学連の闘いのようにさ。あれ見てね。たまらなくなった。気がついたら，白保に移っていた。」

盾を持った警察隊がキビ畑，しかも未亡人となった女性二人が耕す畑に，何の予告もなしに土足で踏みこみ，強制測量をおこなうテレビの映像は，白保地区のみならず，島内，沖縄本島の人々に対して相当の衝撃を与えたようであった。踏み込む警察隊の中には女はいない。しかし矛先は真っ先に女に向けられたのだ。闘争の最前線で闘ってきたCさん（白保地区在住，91歳）は当日の強制測量の模様を次のように語った。

「Bさんが畑で，嫁と闘っているのよ。私は行って，何があったと聞いたら，空港つくるために，ってわあわあ泣いて。手と足を3人の警察官がひっぱって，Bさんを連れて行く。こっちでは穴を掘っている。Bさんと嫁さんも向かっていって，穴を埋める。埋めるとまた引きずる，穴を掘る。足を捕まえてひきずるよ。私はそれをみてからに，男たちに向かっていって言った。警察なんかこんなもんかよねって。この人なんか(Bさんたち)はあんたにどんなことされても手向かいできないよ。目の前で殺したらどうかねって，私が立ち向かっているうちに，畑の主もくる，村の人がくる，押したり，転ばしたりする，空港を作る人が，人の畑を，しかも女手で耕している畑に勝手にね，通知も連絡もなしで，穴掘る。それで，みんな空港反対になったよ。」

暴力，しかも丸腰の女性に対する政治権力による暴力行為への憤り，怒りがその後のオバァたちの10数年におよぶ闘争の精神的支柱となっていたことはまちがいない。そしてもうひとつ忘れてはならないのは，ミースらが「開発は健全で持続可能なライフスタイルを破壊する」と述べているように，白保の海を埋め立てることは，住民の生存の経済（自給経済）の基盤である天

然資源の破壊を意味することに他ならない。海がうめたてられる危機に対して，オバァたちは闘ったのである。闘争の様子について大阪から移住したDさん（86歳），そしてCさんは次のように語っている。

「浜辺で起動隊と闘ったよね。悔しいからさ，火燃やすわけ。車のタイヤまでもってきてね。燃やしてね。風向きで機動隊のところに黒い煙がいくわけよ。だんだん薪がなくなるし。波打ち際でこうやっておがんでね。泣きながらね。絶対忘れられない。ああいう修羅場だったから，ぜったい負けないって海の神様に向かって，助けをもとめていたかもしれない」（Dさん）

「しょっちゅう海にいくから絶対海は守る。調査団がくるとか，機動隊が楯もってくるとき，みんなちんちんつかまえて転ばすというて暴れたのよ。賛成するひとは白保からでていけよというくらい暴れたさ。そんなときは先頭にたってたさ。どこの誰でも関係ない。部落の人は飯食っていけない。子供育てられないって暴れたよ。オバァたちが団体つくってさ，ひとつになってさ，ああしようこうしようとびくともしなかった。（調査団に対して）あんたは人殺しって暴れたさ。おじいたちも暴れたさ。」（Cさん）

また，Aさんは次のような話をしてくれた。

「空からヘリコプター，リーフの向こうには自衛隊の駆逐艦があった。リーフの中には自衛隊の船がいっぱい。白保の海人の船は8艘くらい。それに向かってヘリコプターが攻めるように近づく。それを見て，私は，これは格好の演習の機会を与えているなと思った。

浜の砂山には高みの見物人がいたんですよ。腕を組んで。白保の人や，町の人が。そのときに，八重山ヒジュルーという言葉を実感した。ヒジュルーという言葉の意味は，冷たい，冷徹な，人情もくそもない，

非情なという意味。でも八重山の言葉ではないんですよ。沖縄の言葉なんです。

機動隊が陸からくる。海上には自衛隊，空からも。陸海空からたった8艘しかないサバニをああいう体制で攻めてきた。恐ろしいと思った。白保の住民で最終的に全面的にでてくるのは，このばあちゃんたちさ(CさんやDさん)。それで機動隊の楯にすがりついてね。自分たちと一緒に死のうっていいながらさ。」

すでに述べたようにCさんは公民館決議が新石垣空港建設に賛成したとしても，自分は絶対に反対すると強調した。その言葉の裏には次のような経験がある。

「戦争とかさ，イラクの子供のこと考えるとね。本当にさ，さびしくて，涙がおちるくらいよ。私にもそんな時代があったのよ。戦争でさ，山に避難して，部落に帰ってきて食べるものもなく，着るものもなく，鍋もない。子供たちのパンツも着物もない。はだしの時代があったのよ。食べ物もない。そんなときに海に行ってさ。あの時，海はきれいでね。清くてね。そのまま取ってきても食べられたさ。

終戦後はきれいかったよ。戦争がなくなる，人間がどんどん増える。宮古からも多良間からも，沖縄からもみんなくる。でもさ，海にいけば貝でも魚でもある。こんな小さい，海水がたまっているところに小さい魚がいっぱいおってさ，なまこもいっぱいあるのよ。どんぶりいっぱい取ってきて，炊いたりした。海のありがたさが忘れられない。誰がなんと言っても，この海はよ，生んで，育ててくれた親よりか，この海のありがたさが忘れられないから，どこまでも反対していくいうてよ。がんばってきた。今も，空港作るっていっても，作るもんなら作ってごらんて思ってるけど。」

「戦争」の記憶は新石垣空港建設反対運動のもうひとつの重要な側面であ

る。第2次世界大戦中，白保には陸軍の飛行場があった。その記憶はいまだに強く残っているのである。家中も指摘しているように白保の住民の戦争の体験は，「住民がサンゴ礁生態系保護の考えを自分たちの空港反対の想いにむすびつけていく背景」として重いのである（家中2001)。

Cさんも飛行場があったために爆撃を何度も受け，山に避難しなくてはならなかったこと，マラリアにかかって多くの住民が亡くなったこと，そして食べ物がなく，戦中戦後，海の豊富な魚や海草に助けられたことなど繰り返し話してくれた。とりわけ次のようなエピソードからは，白保の住民による新石垣空港建設反対運動が，決してサンゴ礁を守るためだけの自然保護運動ではないことがわかる。空港建設は，イノーという生活の基盤を破壊するのみならず，いつか戦争につながってしまうこと，そのような戦争はサブシステンスな生活を破壊するという悪循環を導くことを経験的に知っているのである。

「特攻隊が飛んだときにも防空壕におってさ。兵隊さんはよ，ひもじい思いしているから，食べさしたよ。主人が海の魚獲ってきて食べさした。海の塩で炊いて，魚があれば生きられるからって。特攻隊の若い兵隊が，『ばっちゃん明日の朝は，特攻隊で飛ぶよ。ここの上を3回飛ぶよ』っていったよ。だから，布切れもって3人の子供と振ったさ。屋根の上を3回周って特攻の若者が行った。帰ってこなかった。いまでもずっと覚えているよ。体当たりした兵隊さんのことを思うと，あのときの苦しさを思うと泣くね。親が死んだときよりも苦しいね。

海は銀行以上，母以上だから，私はひとりでもいい，海に飛行場作らさない。海と山と畑があればお金がなくても暮らしていける。海ばっかり，山ばっかり頼って生きてきた。蟹もとってきてね。でも今は海が汚れている。蟹もいるけど，手の間が汚れている。きれいにたわしで洗って食べる。イノーには何人かで行く人もいるし，ひとりでもいくし。空港反対しているときは，夜にも海に行った。夜の潮の関係もわかるから取りに行って，子供に食べさせた。

毒みたいなもの（店で売っているようなもの）は食べない。自分の島のもの，海のもの，山のものしか食べない。お正月の重箱もそう。お供えのサトウキビも自分で作る。もともとは多かれすくなかれそういう暮らしをしていた。じいちゃん，ばあちゃんとかの言うこと聞いてさ。」

外の人たちのサンゴを守る，自然保護のために空港建設に反対すると言う人たちと，オバァたちの運動とどう違うのかという問いに対して，Aさんは次のように答えてくれた。

「1980年代終わりごろに，沖縄県が新石垣空港建設に関する意見聴取という作業に取り組んだ。4000人の声が寄せられた。もちろん，白保は半強制で，雛形を作って書いてもらった。内地からも意見が寄せられた。

内地の人と白保の住民の違いは，あくまでも生活の視点で反対する白保と，自然保護の視点，環境保護の視点で建設反対を唱える本土サイドの視点で，大きなギャップがあった。島の理念のように言っているけれど，意識のずれは当然あった。環境問題，環境という言葉も知らなかったですよね。

当時，アカデミックに捉えるにしても，客観的に見る習慣がなかったから。東京に八重山白保の海を守る会があったんだけど，主張の中に海を守る，サンゴを守るというのはあるけれど，生活というのがぜんぜん滲んでこないです。でもそれって，裏を返せば，それは開発を進める側の視点でもあるわけ。

要するに，あなたたちが生活のことをいうならば，賛成するひとたちだって，生活のために空港が欲しいんですからという論理になる。ジェット機でフルーツを運ぶため，これも生活。生きるための生活のためなのか，儲けなのか，稼ぎなのかっていう違いがある。地元で賛成している人たちは，ほとんど金に換えるための『生活』ですよ。地元の土建業者は周辺でしかない。観光産業といっても，儲かっているのは航空会社と旅行社でしかないんですから。」

Aさんの語りには重要な指摘がふたつある。ひとつは自然保護の視点から空港に反対する内地（外部の人間）の「自然保護の論理」と，ミースらのいうサブシステンスの視点から新空港建設に反対する白保住民の「サブシステンスの論理」とのズレ，もうひとつは，反対派と賛成派の「生活」の論理の違いである。ミースやシヴァらがいうところの「開発のパラドックス」をここに見ることができるのである。

3　おわりに

以上，新石垣空港建設問題を事例に，女性の「不可視化」と「周辺化」の過程をみてきた。そこから明らかになったことは，石垣島と本土や市場とを直結させ，資本主義システムのなかにより効率的に組み込むための装置として機能する空港，その空港建設によって破壊されようとするサブシステンスと，体を張って破壊を阻止しようと抵抗した女性たちの闘いの姿であった。前節でふれたミースら，エコフェミニストは，このようなサブシステンスを破壊しようとする資本主義的な社会システムを家父長的経済システムと呼んだ。つまり，家父長的な経済システムのもとでは，経済価値を生まない場所であるイノーや，魚介類，海草の採取といった労働は容易に「周辺化」，「不可視化」されてしまうのである。

また，一方で生活する人々の生産活動を無視した自然保護だけを目的とした運動論や政策が採られることの危うさもまた明らかになった。青サンゴが白保の海を守ったのか。国際的に評価の高い青サンゴがあったから，白保の海は守られたのか。けっしてそうではなかったはずである。たとえ青サンゴがなかったとしても，オバァたちは，空港建設闘争にたちあがったにちがいない。自然保護という理念や運動とは無縁のところで，オバァたちの闘争は始まったのである。

本来，開発とは，人間の幸福と豊かさをもたらすはずのものである。しかし，開発はその過程の結果として，生存の経済（自給経済）の基盤である天然資源の破壊をもたらす。そしてミースもいうように，環境破壊の過程で

もっとも「不可視化」され「周辺化」が進むのが女性たちということになる。だからこそ，環境破壊を引き起こす開発に対して，まっさきに女性たちが反対運動や自然保護活動に立ち上がる必然性が存在するのである。そして，金銭的価値を優先する男性たちとサブシステンス（生命維持，生存）の基盤を保持し，「環境を救済」しようとする女性との間に対立がおきるのである。

Aさんが語ったお金のための「生活」と，生きるための「生活」，この2つの「生活」の概念をめぐる対立はまさに，ミースらが指摘する対立と同じ構造をもっているのではないだろうか。空港建設によるイノーの埋め立ては，食料を入手困難にしてしまう。収入源のないオバァたち，自給的生活，サブシステンスな暮らしを成り立たせてきた資源を失うことになる。だからこそ空港建設反対については，そのような女性たちの貧困化をも視野にいれた議論を展開すべきであったのではないだろうか。

事例を通して，筆者は女性が社会的支配によって悩まされているときは，地球上の多くの生命が同様に脅かされているという，エコフェミニズムが発するメッセージを改めて確認した。だからこそエコフェミニストの関心は，身近な環境問題から地球環境問題全般，原発問題，有害物質による自然環境の汚染と身体の破壊，人口問題，生殖技術，そして新しい政治経済，社会のあり方まで広い範囲にわたらざるを得ないのである。

最後に，繰り返しになるが，エコフェミニズムは人間社会の不公正と環境破壊のつながりを追及する実践であり，思想であり，女性と男性，人間と自然，人間と人間とがよりよい関係性を築けるようなジェンダーに公正で，持続可能な社会のあり方をめざすものであることを強調しておきたい。

〔付記〕本稿は，2001～2003年度科学研究費補助金に依拠してなされた研究成果の一部であり，科研費報告書の第1章「環境問題における女性の『不可視化』とはなにか」，第2章「環境問題における女性の周辺化と不可視化 ── 沖縄県石垣市新石垣空港建設問題の事例から」を加筆修正したものである。

（はぎわら　なつこ　立教大学）

〔注〕

(1)　筆者は脇田とともに，環境問題の現場における「環境と女性」に関する傾向として，以下の3つを確認した。「①ＮＰＯやＮＧＯ，市民活動団体，地域住民団体など組織的な環境運動や活動の現場においては，団体の代表者や活動内容の意思決定の決定権を握っているのは男性であっても，実質的な活動は女性が担っているということが少なくない。②環境問題が重要な政治課題，社会的課題になるにつれて，男性が地域社会の社会的意思決定を握り，それまで環境問題について発言し，行動してきた女性たちが周辺化されるという状況がみられる。③その過程で環境問題の存在を比較的初期の段階で発見し，行動するのは女性であることが多いのにもかかわらず，社会的問題として認知されることが少なく，結果として，女性の発言や行動が無視され，環境問題への対応の遅れにもつながった可能性も否定できない。さまざまな環境問題や環境運動にみられる以上3つの傾向は，女性の「不可視化」や「周辺化」として概念化できるものである。」(脇田・萩原 2005：1－2)。

(2)　財団法人トヨタ財団が1979年～1997年の間，7回実施した助成プログラムである。

〔引用文献〕

古田睦美・善本裕子　1995 「訳者解題」『世界システムと女性』藤原書店

萩原なつ子　2000 『“身近な環境”に関する市民研究活動と市民のエンパワメント ── トヨタ財団助成対象チームの事例にみられる〈市民知〉の形成 ── 』お茶の水女子大学学位論文（博士）

萩原なつ子　2001 「ジェンダーの視点で捉える環境問題 ── エコフェミニズムの立場から ── 」『講座　環境社会学　第5巻　環境運動と政策のダイナミズム』長谷川公一編　有斐閣

萩原なつ子　2003a 「フェミニズムからみた環境問題 ── リプロダクティブ・ヘルスの視点から」『シリーズ環境社会学6　差別と環境問題の社会学』桜井厚・好井裕明編　新曜社

萩原なつ子　2003b 「環境とジェンダー」『開発とジェンダー』田中由美子編　国際協力出版会

萩原なつ子　2005 「開発は女性を解放したか」『ジェンダーで学ぶ文化人類学』田中雅一・中谷文美編　世界思想社

熊本一規　1992　4月12日付け沖縄タイムズ

熊本一規　1999 「海はだれのものか ── 白保・夜須・唐津の事例から」『講座　人間と環境1　自然はだれのものか「コモンズの悲劇」を超えて』秋道智彌編　昭和堂

Mies, Maria, Bennholdt-Thomsen, Veronika and von Werlhof, Claudia　1988 *Women: The Last Colony, Zed books.*（= 1995　古田睦美・善本裕子訳『世界システムと女性』藤原書店）

鵜飼照喜　1992　『沖縄・巨大開発の論理と批判 ── 新石垣空港建設反対運動から』社会評論社

脇田健一・萩原なつ子　2005　科研費報告書『環境問題と環境運動における女性の「不可視化」── ジェンダーの視点にもとづく環境社会学的研究 ── 』（基盤研究（c）（2）代表：脇田健一）

家中茂　2001　「石垣島白保のイノー ── 新石垣空港建設をめぐって」『シリーズ環境社会学　2　コモンズの社会学』新曜社

国際ジェンダー学会誌　vol. 4 (2006)

Women's Invisibility and Marginalization in Environmental and Developmental Issues

—From a Case Study of a Community Movement Against the Construction of a New Airport on Ishigaki Island, Okinawa—

HAGIWARA Natsuko
(Rikkyo University)

Many women have played an important role in environmental or community development issues. These women, in spite of a variety of different problems and social oppression, have demonstrated their determination to keep active in developing community movements, which have resulted in genuine social meaning and political action. However, when the women began to take part in a community movement, they were generally ignored by large sections of society and became alienated and marginalized. The conventional social ideology failed to recognize the women's contribution sufficiently and regarded the women's voices as not worth listening to. Even today, women still suffer from the negligence of society which denies them full participation in the decision making process.

This paper aims to explore how women become "invisible" and "marginalized" in community movements in the field of environmental problems, in spite of the fact that they are very active and play an important role in the movements. Firstly, I will discuss "eco-feminism" which emerged in Europe in the 1970s and raised the question of women's "invisibility" and "marginalization" as a social problem. Secondly, I will analyze the process of women's "invisibility" and "marginalization" in a specific case of an environmental community movement called "Anti Construction of a New Airport on Ishigaki Island, Okinawa," which became a topical social issue in the 1980s. My analysis will be based on several of the concepts of subsistence recognized by eco-feminism. Thirdly, I will discuss the importance of women's participation in all aspects of the various steps involved in solving environmental and developmental problems. In particular, women's participation in the decision making process is a vital element for constructing effective solutions for any community.

Key words : environmental and developmental issues invisibility, marginalization, eco-feminism subsistence